



18世紀生氣論の成立と生命の科学化

名古屋市立大学
寺田元一

序

現代生物学においては、専門分化が進む一方で、生物・生命について、総合的で全体論的な視座が求められる状況がある。本稿では、生氣論や生物学の誕生という、いわばひとつの大きな「生命の科学」の成立期にさかのぼって^{註1)}、この生成期の「生命の科学」が、生物という、無生物とは異なる固有の対象を科学的に扱うために、機械論化や物理化学化ではなく、総合化、全体論化を目指したこと、そして、それがこの科学の科学性の一端を構成したことを示したい。

全体論化というと、科学化ではなくむしろ哲学化とみなされやすいが、筆者は、フランス科学認識論の考えをとり入れることで、全体論的な自然像——ここでは生命（生物）像——を有することが、科学性の重要な基準のひとつだと考える立場に立っている^{註2)}。実際、新たな「生命の科学」の教科書をそれまでの自然誌や生理学の教科書と区別するかたちで書こうとすれば、それ特有の対象、方法、概念が何であるかを示すことと並んで、それが依拠する全体論的生命（生物）像を提示することが決定的に重要となったはずである。このような全体を展望する生命像がなければ、個別的研究成果が全体的な図のなかでの確かな位置を占めて、他の研究成果と関連し合い、科学としての体系性を獲得することも、どこに研究上のニッチ（ミッシング・リンク）があるかをとらえることもできなくなってしまうだろう。そのような他の科学へと開かれた広い自然像の基盤を失えば、その

科学はもはや科学とはいえない。

従来、自然科学の科学性は、物理学などをモデルにして、数式化や実験といった方法論——しかも物理帝国主義的に狭隘化された方法論——的基準から狭く限定されることが多かった。シンポジウムで横山輝雄氏が紹介したクロード・ベルナルの科学観にも、そのことは明らかに看取できた。しかも、そうしたベルナル的な生命科学観は弱まるどころか、分子生物学やバイオテクノロジーなどの発達によってますます強められている。それゆえ本稿はそうした現代の狭い生命科学観に対する問題提起という意味合いも有している。現在の生命科学は分子生物学化、物理化学化の方向を追求することで、物理学のような科学的厳密性を誇ろうとしているようであるが、逆にそのことによって、全体論的生命（生物）像との関連を失ってしまっている。実際、分子生物学的な断片化された生命像と進化論や生態学——いやむしろ環境科学——が提示する総合的な生物像の間には乖離があり、両者を統一的に示すような方向性が生命科学全体に欠けている。その欠如が、生命科学の科学性の重要な基準のひとつである体系性——生命（生物）像と深くかかわる——に疑問を投げかけているといえよう。

しかし、18世紀後半から19世紀初頭にかけて成立した、生氣論や生物学を含む新たな「生命の科学」のほうは、その科学化にあたって、従来の植物学、動物学という区別を越えて、生物という固有の総合的对象を、新たな方法と概念によってとらえようとしただけでなく、従来の機械論的生